

## 新しい教育実践の開発に必要な教師の行為能力

### - 「問い」の追究を通じた学習活動創りに視点を当てて -

後藤郁子(お茶の水女子大学グローバルリーダーシップ研究所特別研究員)

#### 研究の経過と継続研究の目的

報告者のこれまでの研究で、個別学習相談での自由研究・調べ学習における「つまずき分析」(認知カウンセリング(市川:1993))の結果から、児童生徒の「問い」の追究を目指した模擬授業が、教師志望の大学生・院生の探究型学習創りの指導力向上に有効であると考えられた。(図1)

その基になっているのは、2011年から2014年までに都内の小中学生延べ133名に行った個別学習相談のうち、調べ学習・自由研究に関する13のケースを

分析した結果である。「問い」の設定(実質的な動機づけ)の場面での「つまずき」が最も多く、その要因としては、集めた情報を読解し、整理・焦点化できないという「学力」の問題、指示型



図1 教師志望の大学生・院生の探究力育成のフィールド

学習から抜け出せない「学習観」の問題、自分の興味と新たな情報との間で生じたコンフリクトが解決できないという問題であった。これらの問題を追究しながら学習活動を工夫することによって、大学生や院生は探究型学習の創造に必要な要素を体験的に学ぶことができ、結果として指導力育成に繋がったと言える。しかし、「個別ケースを授業力育成に活かせるか」については、十分成果が得られているとは言えない。

継続研究では、これまでの研究をベースに、大学生・院生の模擬授業体験を通して「児童生徒の意識や思考(つまずき)に向き合う授業」の実現=授業変革のために必要な「行為能力」とは何かを明確にしていくこととした。

#### 研究の方法

本研究においては、研究手法としてレヴィン(1954)によって提唱されたアクションリサーチを採用し、報告者が自由研究支援やその後のケース検討会、及び科学教室の企画・実施・振り返りに研究者として介入する。

フィールド: 教師志望の大学生・院生が個別学習相談を行っている都内の小中学校及び教育センター。教育センターでは、2015年より学習相談の一環として「調べ学習・自由研究」や、理科教室・科学教室を実施している。

記録: 個別学習指導や理科教室・科学教室を実施後に作成した大学生・院生の指導記録及びケース検討会での記録。参加した児童・生徒が活動中や終了後ワークシートに記述した内容、及び活動中の発言や声の記録。

#### 継続研究の結果 教育実践の変革に必要な教師の行為能力としての「再デザイン力」

本研究では、2012年から実施している理科教室・科学教室での10事例を対象とした。教師志望の大学生・院生は、自由な発想で自らの潜在能力を引出しながら、「問い」の追究を通じた理科・科学活動の充実・深化を目指し、状況に応じた「活動の変更=変革」や「企画そのものの変更=変革」を行った(エンゲストローム:2007を参考にした協働学習)。

■10事例の活動中の記録(報告者メモ、ビデオ)や活動後の振り返り記録(実践者の記録、ケース検討会での記録)から、「活動の変更」を抽出し、変更の目的から行為の意味を概念化したところ、実践者による活動の変更行為は「活動の再デザイン」と捉えられ、表「活動の変革=再デザインの行為能力」としてまとめた。

■理科・科学教室の活動を通し、模擬授業者は子どもたちと相互作用的にかかわる中で、自ら設定した活動内容をデザインし直していた。また、デザインのし直しは、子どもたちの科学的思考を育む上でも評価されるものであった。この「再デザイン力」こそ、新しい教育実践の開発を行うために必要な行為能力の重要な観点と言えた。エンゲストローム(1991)は、こうしたデザインし直す時に見いだされる解決モデルについて、変革を成し遂げる仲介的概念ツールとしている。

■再デザインの要件: ①子どもたちの思考(実態)に即した課題解決に向けた問いの追究であること、②学習の本質的要素(科学性・知識・思考活動など)が保証されていること。

以上のことから、継続研究の結果として、①②の要件を満たした「活動の再デザイン」であることが、個別ケース(探究型学習における個のつまずき)を活かした授業づくりができる行為能力の観点として示すことができる。本研究が目指した「新しい教育実践の開発に不可欠な行為能力」は、教師の「自立性と変革力」により獲得できるものである。

この継続研究の結果は、初年度の研究結果と合わせて、ネットワーク(エンゲストローム,2008)を基にした、「教師を対象とした探究的学習プログラム」として現場展開を図っていく。